2024年2月25日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

地にも成させたまえ

［ヨハネによる福音書12章20～36節］

さて、祭りのとき礼拝するためにエルサレムに上って来た人々の中に、何人かのギリシア人がいた。彼らは、ガリラヤのベトサイダ出身のフィリポのもとへ来て、「お願いです。イエスにお目にかかりたいのです」と頼んだ。フィリポは行ってアンデレに話し、アンデレとフィリポは行って、イエスに話した。イエスはこうお答えになった。「人の子が栄光を受ける時が来た。はっきり言っておく。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。自分の命を愛する者は、それを失うが、この世で自分の命を憎む人は、それを保って永遠の命に至る。わたしに仕えようとする者は、わたしに従え。そうすれば、わたしのいるところに、わたしに仕える者もいることになる。わたしに仕える者がいれば、父はその人を大切にしてくださる。」「今、わたしは心騒ぐ。何と言おうか。『父よ、わたしをこの時から救ってください』と言おうか。しかし、わたしはまさにこの時のために来たのだ。父よ、御名の栄光を現してください。」すると、天から声が聞こえた。「わたしは既に栄光を現した。再び栄光を現そう。」そばにいた群衆は、これを聞いて、「雷が鳴った」と言い、ほかの者たちは「天使がこの人に話しかけたのだ」と言った。イエスは答えて言われた。「この声が聞こえたのは、わたしのためではなく、あなたがたのためだ。今こそ、この世が裁かれる時。今、この世の支配者が追放される。わたしは地上から上げられるとき、すべての人を自分のもとへ引き寄せよう。」 イエスは、御自分がどのような死を遂げるかを示そうとして、こう言われたのである。すると、群衆は言葉を返した。「わたしたちは律法によって、メシアは永遠にいつもおられると聞いていました。それなのに、人の子は上げられなければならない、とどうして言われるのですか。その『人の子』とはだれのことですか。」イエスは言われた。「光は、いましばらく、あなたがたの間にある。暗闇に追いつかれないように、光のあるうちに歩きなさい。暗闇の中を歩く者は、自分がどこへ行くのか分からない。光の子となるために、光のあるうちに、光を信じなさい。」イエスはこれらのことを話してから、立ち去って彼らから身を隠された。

[1]　 一粒の麦が、地に落ちるということ

先週は浦和教会での礼拝に5名の者が行かせて頂き、またこちらの川越教会の会堂でも、モニター画面でその礼拝の配信を映して頂き、同時刻に共に礼拝を持たせて頂くことが出来ました。こういうことが出来る時代になったんだなということをつくづく思います。浦和教会との「教会相互訪問」が一応終わったわけですけれども、浦和教会はこの川越教会の母教会でもありますし、本当に良い出会いと礼拝の経験だったと思います。皆さんのお祈りを心から感謝しています。

さて、今日の聖書の箇所なんですけれども、私はこの箇所を読ませて頂いて、こんなことを思わされました。それは、私たちが神様やイエス様を信じるということは、軽いことではなく、重たいことだなということです。確かに信仰ということは個人の自由です。強要されることではありません。「信仰の自由」ということ自体、日本国憲法でも保障されるとても大切なことです。しかし、どうなのでしょう？信仰というのは、取って付けたような、あってもいいけど、無くてもさほど困らない、そういうアクセサリーみたいなものなのでしょうか？そうではないですよね。しかし、教会或いは聖書を出会う前まではそのことを知らなかった私たちではなかったのではないでしょうか？そして、今日の聖書の箇所などを改めて読むと、神様・イエス様の私たちを愛する思いは、何にも比べることが出来ないほど、深く、重く、ある意味切なく、真剣なものなのだなと思うのです。

今日の箇所の中、12章23節で、「人の子が栄光を受ける時が来た」と主イエスは語っています。これだけ聞くと「栄光を受ける」とは、まるで、権威ある人から勲章をうけるとか、スポーツ選手が金メダルを与えられるような輝かしいイメージを思い浮かべますが、イエス様の場合、どうもそれとは逆のようです。続く24節ではこう仰っています。「はっきり言っておく。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ」　。麦が地に落ちて死ぬということと、これからのご自分の運命というべきものを重ねて語っている訳です。ご自分が死んでしまうということと「栄光」ということが一つであるということは、常識的には考えられないことです。惨めな死、ぶざまな死。これを素晴らしいと賛美する人はいません。ではクリスチャンはおかしな人なのでしょうか？おかしいのかも知れません。しかしクリスチャンは、十字架の上で死なれたイエス様に「神の栄光」を見る人、と言って良いと思います。その「死」は正にこの地に落ちた一粒の麦のようであり、その「死」によって「多くの実が結ばれる」という、自然界でも起こっている不思議ないのちの法則を思い起こさせ、そのような神様の深いご計画に、私たちの目を開かせようとされています。

さらにこの後ヨハネは、他の福音書では十字架に架かられる前夜の「ゲツセマネの祈り」として記されている、イエス様と父なる神様との間の格闘とも言えるやり取りが短く記しています。27、28節。「「今、わたしは心騒ぐ。何と言おうか。『父よ、わたしをこの時から救ってください』と言おうか。しかし、わたしはまさにこの時のために来たのだ。父よ、御名の栄光を現してください」」。 そして、イエス様はここで、ある意味神様らしくないとも言えるような心の揺れ動きを露わにされ、それを言葉にされます。「今、わたしは心騒ぐ。何と言おうか。『父よ、わたしをこの時から救ってください』と言おうか」。一粒の麦が地に落ちて死ぬ。イエス様は既にそう決意をされていたのかと思っていましたが、そう簡単なことではなかったのです。この時、主は心を騒がせているのです。出来る事ならこの苦い杯は飲みたくないと。しかし、次の言葉はこうです。「しかし、わたしはまさにこの時のために来たのだ。父よ、御名の栄光を現してください」。…この短い27～28節に記されている時間の流れの中で、私たちに対する神様の救いが定まったのです！「わたしはまさにこの時のために来た」。重たい言葉です。イエス様の命が、十字架の上で神の小羊として屠られることが決定づけられたのです！この地上でのイエス様の命は、正に一粒の麦のように、この大地の中に落ちることになるのです。

[2] 「天の喜び」が地の上に成就する

そして、その時です。ヨハネによる福音書だけが記している印象的な出来事が起こります。「すると、天から声が聞こえた。「わたしは既に栄光を現した。再び栄光を現そう。」そばにいた群衆は、これを聞いて、「雷が鳴った」と言い、ほかの者たちは「天使がこの人に話しかけたのだ」と言った」。これは、とても特別なことだと思います。「天」から声が響く。イエス様は、この地で、一粒の麦となることを決意されています。しかし、そのことは、「天」と結びついています。「天の喜び」と言っても良いと思います。

私は今日の宣教の題を「地にも成させたまえ」としたのですけれども、それは私たちが礼拝の中でも捧げる「主の祈り」の中の言葉だということはすぐお分かりだと思いますが、それは私たち人間からの祈りというよりも、まず、主イエス様をこの地上に送られた父なる神様の祈りだったのだ、と思いました。ですからこの時も、神様自らがイエスに声をかけられました。「わたしは既に栄光を現した。再び栄光を現そう」。神様の栄光は既に現わされたと言うのです。それはいつでしょうか？色々な解釈が出来るかもしれないですね。山の上でイエス様のお姿が輝いた時（変貌山）。或は、主がバプテスマをお受けになられた時、その時も「天」からの声が響いているのです。この、主イエスこそが神から遣わされた者であることを「天」の声は証をしていました。私はもう一つ、神様の栄光が現れたその光景を思い起こしました。夜空に夥しい天使たちの群れが「神に栄光、地の上には、みこころにかなう人に平和があるように」と讃美した、あのベツレヘムの家畜小屋でイエス様がお生まれになったクリスマスの夜です。

　そう考えると、イエス様の飼い葉桶から始まった地上の歩みは、バプテスマを経て、また山上でお姿が神々しく輝いた出来事も通りながら、最終的にはこの地上で最期の時を迎える訳ですが、そのいずれの肝心要な局面において、「天」が声を発しているのです。それは何のためですか？ 30節からイエス様は凄いことを語っておられる！と思います。「この声が聞こえたのは、わたしのためではなく、あなたがたのためだ。今こそ、この世が裁かれる時。今、この世の支配者が追放される。わたしは地上から上げられるとき、すべての人を自分のもとへ引き寄せよう」 。これが十字架の目的なのだというのです。わたしのためじゃない、あなた方のためだ！あなたの救いのため。わたしの戦いとは、あなたと戦うのではなく、この世を我が物顔に支配している者（サタン）との戦いなのだ。そして、そのサタンの力は完全に駆逐される時がやってくる。どうか、わたしの業を信じて欲しい。わたしが地上から上げられる時、わたしはすべての人を自分のもとへ引き寄せるのだ、と。―こんなにはっきりとご自分の使命と十字架の目的を語っている所は他にありません。「天」のみこころが、イエス様によって、地に、つまり私たちの生涯の中に実現するのです。私たちはそれを聞かされています。何と幸いな事でしょうか！

優れたクリスチャン作家の犬養道子さん（カトリック）という方が『新約聖書物語』という本（新潮文庫）を書いておられますが、この箇所に当たる文章に私はとても心打たれました。それをご紹介してお祈りをしたいと思います。

**（イエスの祈りの所から）「いま、わが心は苦悩の底にある。天父よ『この時』からわたしを救いたまえと祈ろうか。―いな、『この時』のためにこそわたしは来た。『この時』は、すべてわたしと共にいる者が天父に尊ばれる者となるがためにこそ。天父よ、御名にほまれあらんことを！」そのとき、天が動いた。深い、雷のとどろきの如く声があたりを満たした。人々はあるいは伏し、あるいは身を寄せ合って、畏れつつ叫んだ。「天使の声だ！」「いや、雷だ！」。イエスははるばる求めてやってきたギリシャの人々を交える群衆におごそかに告げた。「いまの声は、お前たちへの証しの声、おまえたちのために語られた声。神のしるし。いまこそ。この世を支配していた死と暗闇の力は審かれる。わたしが地上から挙げられて十字架に挙げられ、復活に挙げられる時、すべての民はわがもとに引き寄せられる。」思えば三十数年前彼の誕生の直後、小アジアから外国の三人がはるばるとイエスを「見に」来た。神殿を去る今日、ギリシャからはるばると求める者がイエスを「見に」来た。「すべての民」の先がけとして。イエスは語る。「光はまだしばらくの間、ここに在る。光のあるうちに光の中を歩め。暗闇に追いつかれるな。」これが神殿でのイエスの最後のことばであったのだ。「光在り。光あれ。光の子となれ」。**

　天の父なる神様、今日の礼拝を感謝致します。あなたの御思いは、いかに深く、汲み尽くせないものでしょうか。しかし、あなたは仰って下さいました。「わたしは地上から上げられるとき、すべての人を自分のもとへ引き寄せる」と。こんなに大きな希望はありません。この地上で罪にまみれて生きる私たちなのに、あなたは私たちを見出し、引き寄せ、御心が完全に実現している天の喜び、天の赦し、天の祝福に与ることを約束してくれます。これは全ての人のための約束です。そのために教会があります。どうか、あなたの命がけの愛をまっすぐに受け止め、そこに生きる私たちでありますように。主の御名によって祈ります。アーメン。